食の国際交流と豊かな食生活をめざして

日本通として知られ、ヨーロッパの生活も経験されて、文字通り国際的な味覚を持たれた元米国駐日大使・故ライシャワー博士は、「食の国際交流」が世界中の人々に豊かな食生活をもたらしていることを、当社に寄せたメッセージのなかで述べられています。そしてその例証として、日本人の食生活に欠かせない基礎調味料・しょうゆのアメリカ進出と成功を取り上げています。

また評論家の花田清輝は「真にナショナルなものは、実はインターナショナルである」と喝破しましたが、まさにしょうゆについて述べているかのようです。

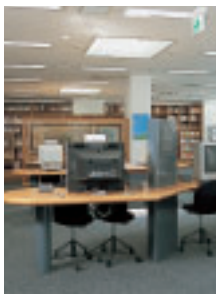
このように一国の食文化が、世界各国の文化に融け込み、新しい食文化として芽生え、成長するとき、人々のより豊かな食生活が育まれるのです。

当センターの活動が、日本はもちろん世界の国々の食の歴史や食文化の紹介にとどまらず、「食の国際交流」と「食育」に少しでも寄与できるよう努めていきたいと思います。

キッコーマン国際食文化研究センター

閲覧コーナー

図書コーナー


メディアコーナー

キッコーマンの故郷―野田の街並みに調和した野田本社

企画展示コーナー

http://kiifc.kikkoman.co.jp/

キッコーマン国際食文化研究センター

〒278-8601　千葉県野田市野田250　TEL:04-7123-5215　FAX:04-7123-5218

<開館時間>午前10時～午後5時　<休館日>土・日曜日、祝日、年末・年始、ゴールデンウィーク、旧盆

※詳細は当センターへお問い合わせください。

表紙の解説

「浮絵 江戸日本橋小田原町肴市の圖」（礫川亭永理画）

「浮絵」とは、西洋画のパースペクティブ（遠近法）の手法により、空間の奥行きを強調させたもので、江戸中期頃に流行した。

永理のこの作品は、寛政年間（一七八九―一八〇一）の末頃に描かれたようである。画面では魚売場の直線を強調させているが、前景を浮き立たせるあまり、人物の縮尺がちぐはぐになってしまっているのはご愛嬌だろう。

小田原町肴市とあるが、これは魚河岸のメインストリートである本船町の風景。隣町の小田原町が魚河岸発祥地であることから、魚河岸のことを「小田原町」と通称した。画中には魚売りの他にも大八車を引く人、おかみさん、御用魚運搬の者から、菓子屋、本屋、幇間風の人物など、さまざまの通行人を賑やかに描き分けている。日本橋川を挟んで対岸の四日市町では塩干物などが商われて繁盛した。岸辺に繋がれた「平田船」は桟橋代わりに固定したものだが、本来これは本船町側になければおかしい。魚売場に積み上げられた米俵もよく分からないが、ユーモラスな画趣が楽しめる作品である。

永理の生没年は不詳だが、天明期末から文化期までの長期にわたり、風俗画や美人画、役者絵、色紙絵など幅広い活動を続けた絵師である。特に美人画が全盛を迎えた寛政期は、喜多川歌麿や鳥文斎栄之らに列するほどの存在だった。画風から判断して、栄之の高弟（鳥高斎栄理）と同一人物との説もある。

所蔵：財団法人 平木浮世絵財団